

20代の過ごし方

阿瀬はる美

テクニカルエディター／技術翻訳者

1985年3月、私は第三学群情報学類を卒業した。それから20年、実に多くの幸運に恵まれた。学生時代は単にプログラミング好きだった私が、今や小さい会社の取締役という、学生時代には考えもしなかった立場にある。大学と現在とのつながりを考えたことはなかったが、この原稿依頼を機会に振り返ってみたら、今の私を形成している要素ひとつひとつが、20代の経験に結びつく気がした。

第三学群情報学類

IT業界に身を置く私にとって、第一の幸運は、情報学類を選択したことだろう。逆算していただければ想像できるだろうが、私は1981年4月に筑波大学に入学した。高校時代は白衣を着ているのが大好きな化学部の部長だった。だから、化学実験を続けることができる職業に就きたいと思っていたし、それに有利な大学に進みたかった。

しかし高校3年のとき、「コンピュータを勉強したい」という友人の発言をきっかけにして「コンピュータを勉強すれば、化学関係の仕事もあるだろうし、気が変わってもなんとかなるかも…」と優柔不断ともいえる動機で、私はコンピュータを専攻することにした。

その当時、「情報」という名前のつく学部があるのは、(少なくとも私が通学を許される範囲にある国立大学では)筑波大学と東京工業大学しかなかった。実は、私は化学は大好きだけど、物理が大の苦手。2次試験に物理が必須の東工大は無理だった。一方、筑波大学は物理・化学・生物から1つを選択すればよかった。

かくして私は、情報学類が「工学部」であることを知らずに入学したのだった。

外資系への就職

私の学生生活は、クラブ活動に打ち込む

でもなく、熱心に勉強していたわけでもない。ただ、なんとなく4年間を過ごした。研究室を選んだ理由は「先生と誕生日が同じだから」と、実にいい加減である。

4年生の春に就職活動が始まったとき、私にはまだ「化学」への執着があったのだが、男女雇用機会均等法が施行される前だったこともあり、「女性は採りません」と見学さえも断られてしまった。一方、コンピュータ業界では、「女性は金の卵」と言われ、男女の差別がないことが強調された。男女の待遇に違いがあることが許せない私は、コンピュータ業界を選んだ。しかも、外資系のミニコンメーカーである。

このときに卒論の担当教官から言われた一言がある。「阿瀬さんが外資系に入れるなら、外資系に英語力は関係ないね」。私は英語が大嫌いだったのだ。そんな私が卒業後、翻訳書だけでも10冊ほど出している翻訳者となっているのだから、不思議なものである。

テクニカルライターという職業を知る

最初に外資系に就職したことも、私にとっての幸運だった。専用回線による海外とのネットワーク接続が当然のようにあったこと、電子メールでのコミュニケーション手段を身につけたこと、英語の資料を読まざるを得なかったこと。どれも当時では

外資系ならではだった。そして何より「テクニカルライター」という職業を知ったことが、人生を大きく変えた。

入社から半年間の研修のあと、私はソフトウェア開発部に配属された。理由は「コンピュータのことはよく知っているし、お勉強はできるけど、お客さんの前に出すのはちょっと…」ということだった。

さて、外資系でソフトウェア開発部というと、「日本語化」である。ただし、社員がプログラムに手を加えることは希で、主な仕事はドキュメント作成だった。その部署には1人だけ専属のテクニカルライターがいて、テクニカルドキュメントの決まり事などを教えてくれた。私は、説明書を書くのが大好きであることに気付いた。そのうえ「技術者は、プログラムは書けても、それを人に伝えるのが下手。私なら、技術者の言葉を人に分かるように伝えることができる」と確信するまでになってしまったのだ。

テクニカルライターとしての経験

結局、私は最初の会社を2年3ヶ月で辞めた。次の職業を「テクニカルライター」と決めて就職先を探したが、家電のマニュアルを書く会社にしか巡り会えなかった。私は「技術者向けのテクニカルライター」になりたかったのだ。

そんなある日、『UNIX MAGAZINE』という雑誌を目にした。なかを見ると、そこには多くの翻訳記事があった。「こういう翻訳なら、私にもできる」と思った私は、『UNIX MAGAZINE』の出版元であるアスキーに、友人の紹介で就職した。後からわかったことだが、私が手にした号から海外誌と提携して、翻訳記事を載せるようになったそうだ。本当に私はラッキーである。

アスキーでの配属先は、「アスキーUNIX」と言われた日本語UNIXを開発している部署だった。ここで私は、OSのインストールマニュアルからアプリケーションに至るまで、さまざまなマニュアルを書いた。ネットワークに関しては日本語の資料がほとんどなかったため、私の書いたネットワークの解説部分が大手企業の研修資料として使われたという話も聞いている。

自分の担当するマニュアルが時代を先取りしていた幸運に加えて、マニュアルの作成にTeXという組版システムを使っていたことも後の幸運をもたらした。私はおそらく日本で最初のTeX(正確にはLaTeX)のパワーユーザーである。TeXユーザー会に出席するために毎年アメリカに出張したことで海外へのつながりができた。さらに、『UNIX MAGAZINE』にTeXの連載をもち、その連載が単行本にもなった。UNIXという狭い業界ではあるが、有名人になれたのだ。

この時期の忙しさを思うと人生に無駄はないと実感する。

アメリカ留学

29才のとき(1992年)、私はアメリカに短期留学した。アスキーでは1日おきにしか家に帰れないくらいに忙しかつたのに報われないことが多過ぎて、仕事を辞めるつもりで決心したことだった。(実際には、有給と代休と少しの欠勤で3ヶ月間休んだ。)

留学先は米国マサチューセッツ州に決まっていた。季節は冬。寒い季節に寒いところに行ったほうが、勉強に集中できる。

この留学は、人生最大の貴重な経験だった。ルームメイト(アメリカ人)とは親友になり、何人かの先生と個人的な話さえるようになった。20才前後で留学する人たちをうらやましいとも思ったが、社会人になってから改めて学生に戻ると、「今やるべきこと」への集中力が違う。ただし、学生という立場は教わるだけで自分から生み出すものがないことに空しさを感じ、「早く仕事に戻りたい」と帰国の日を待ち遠しく思うこともあった。

なお、アメリカ留学中に「バブル崩壊」と呼ばれる株の暴落が起こった。私が帰国したとき、日本は不況に突入したところだったのだ。

独立という選択

アメリカ留学は3ヶ月という短期間だったため、十分に英語が身に付いたとは思わないが、「英語はしゃべれます」と言えるくらいにはなった。それが、私の次の一歩を踏み出させてくれた。

日本に戻ってから3ヶ月後、私は再びアメリカに向かった。TeX ユーザー会に出席するためだった。そこで私は、英語がしゃべれると友人が増えると実感した。仲良くなったアメリカ人やヨーロッパ人に会社を辞めようか悩んでいると話してみたら、誰もが「大丈夫、独立してもやっていける」と言う。「不景気だからこそ、仕事ができる人が生き残れる」と励ます人もいた。私もだんだん「なんとかなる」という気ができて、会社を辞める決心をして帰国した。ちょうど30才だった。

会社を辞めてみると、「技術」と「英語」の両方が得意という人は、当時、かなり貴重な存在であることがわかった。独立したら海外に行くこともないだろうと思っていたのに、北米のベンチャー企業が日本市場に進出する時期だったこともあって、逆に海外に行く機会が増えた。翻訳はもちろん、ときには通訳になることさえあった。カナダで受けたトレーニングを帰国の翌日から日本で展開したこともある。そのうちインターネットが普及して、私のネットワーク

の知識が多いに役立ち、さらにアメリカに行く機会が増えることにもなった。

誤解しないで欲しいのは、英語が重要なのではなく、英語でも日本語でも「コミュニケーションできる」ことが大切ということだ。日本語でコミュニケーションできないなら、英語が得意でも意味はない。

「基礎」を大事にして欲しい

私の場合、会社を辞めてもなんとかやってこれたのは、コンピュータやネットワークの基礎知識と時代の流れが合致したからだろう。でも、漫然と過ごしただけと想像していた大学時代の重要性を、後から感じるようになった。それは専門知識だけでなく、人間関係のつくりかたや考え方にもある。

今の学生は、きっと私よりも多くの選択肢をもっているだろう。たとえば私の学生時代、「起業する」などということはまったく考えにはなかった。30代で成功している起業家たちを見ると感心する。ただしその一方で、あまり性急にはならず、「社会人としての基礎」を作る機会をもって欲しいと思っている。そのうえで自分に自信を持つ何かを見つけて欲しい。世の中には、学生時代には知らなかったことがたくさんある。20代で自分の「基礎」を作ることができれば、きっと元気な30代を過ごせると思う。

いま、42才の私は、これからの人生も絶

対に元気で楽しくなると信じ、20代の人々に混じって仕事をしているのである。

(あせ はるみ/株式会社アルスシステム)

